藍住町中学生海外派遣事業を終えて

藍住中学校　教諭　住友　優子

「アー ユー オカーイ？」と走る車の運転席から大きな声。それは、この派遣事業に参加している１２名の生徒たちを迎えようと、校舎を囲むフェンスのところで立っていた私たちにかけられた言葉でした。（えっ、何かあった？）と一瞬、緊張が走りました。“Yes, I’m OK. We’re just waiting for our students.”と答える添乗員のさゆりさん。そういえば、オーストラリアでは“A”を「アイ」と発音することを思い出しました。彼は私たち日本人の様子を見て、“Are you okay? （大丈夫ですか）”と声をかけてくれていたのだと気づきました。オーストラリアでの学校生活が始まる初日、早朝のことでした。そして、近くのスーパーへ明日の食事の買い出しに出かけたときも、“Hello.”“Hi.”と微笑みかけてくれる町の人たち。こうしたフレンドリーで温かなオーストラリアの人たちの気持ちに触れるごとに、嬉しさと、もっともっと英語を使って彼らと自由に会話ができたらという思いが強くなってきました。１２名の生徒たちも同じことを感じていたと思います。

昨年に引き続き、「セント・フィリップス・クリスチャン・カレッジ・ゴスフォード」が私たちの学び舎です。キリスト系の私立学校で、幼稚園から高校生までが在籍しています。そこには、私が経験してきた日本の学校との違いから起こる驚きや発見がたくさんありました。午前の授業の合間には「モーニング・ティー」の時間があり、生徒たちは教室を出て、軽食を食べながらおしゃべりを楽しみます。

日本が好きで調べ学習に日本を選んだ小学５年生の授業を参観したときには、その質の高さにも感心しましたが、教室の机の配置にまず目を奪われました。円形に配置された机、カウンター席のような机･･･様々な形式の机が児童たちの席なのです。授業後、整然と前を向いて並べられた席に座り勉強している日本の教室の写真を、思わず私は担任の先生に見せていました。また、年に一度の「ブック・デイ」と呼ばれる学校行事もありました。児童生徒が、いつもの制服ではなく、大好きな本の中のキャラクターに扮して１日を過ごすイベントです。不思議の国のアリスあり、ティラノザウルスあり･･･それは見ているだけでもワクワクする１日でした。もちろん先生方も仮装してなりきります。ミッキーマウスの髭まで顔に書き込んでいる先生もいらっしゃいました。でも何より心を奪われたのは、日々の生徒たちの様子です。すれ違うときには“Hello.”と微笑みます。そして先生方も、“Hello. How are you ？”と続けて、和やかな会話が始まります。明るい雰囲気が校内には満ちあふれていました。

１２名の生徒たちも、日ごとに英語力が増してきました。彼らが物怖じせず自分が知っている単語を使って積極的に話しているから、そのように感じられたのです。この１週間を通して、彼らが得たものは自信と他を慮(おもんぱか)る想像力、そして、世界は広く今このときも、例えば日本と反対の南半球のオーストラリアで、様々な人たちがそれぞれの生活を送っているという実感ではないでしょうか。自分の将来をいくらでも描き続けられる中学生の時期に、海外派遣事業の実施に関わってくださった全ての人たちに感謝申し上げます。